

第57回ABS年次大会で報告して
—『境界から世界を見る—ボーダースタディーズ入門』（岩波書店、2015年）
の翻訳を終えて—

川久保 文紀（中央学院大学）

4月8日から12日にかけて、米国オレゴン州のポートランドのマリオット・ウォーターフロントホテルで第57回ABS年次大会が開催された。私としては、初のABS参加であったが、今回参加するのには、特別な意味合いがあった。というのも、今回の大会から、境界研究ユニット（UBRJ）代表の岩下明裕教授が、米墨国境の研究からスタートした米国の学会で、アジア人初の会長職に就かれることも非常に名誉なことであると同時に、私が翻訳したボーダースタディーズの入門書の原著者と共同パネルを組んで議論をするという機会に恵まれたからであった。オックスフォード大学出版会からVery Short Introductionシリーズが刊行されていることは良く知られているが、その中の一冊として、“Borders”が2012年に出版された。この著作が出版された直後、このボーダースタディーズの標準的な教科書を日本語に訳す意義を感じた私は、岩下教授に相談し、このVSIシリーズの訳書を刊行している岩波書店を紹介してもらうことからこの企画は始まった。原著の内容を踏まえ、日本語のタイトルをどうするべきかどうか非常に悩んでいたが、岩波書店から提案された『境界から世界を見る—ボーダースタディーズ入門』に落ち着いた。さすが出版のプロ集団であると痛感した。途中での多少の中断も含めて、結局、訳了するのに2年かかったが、この学会の2日前になんとか出版することができた。

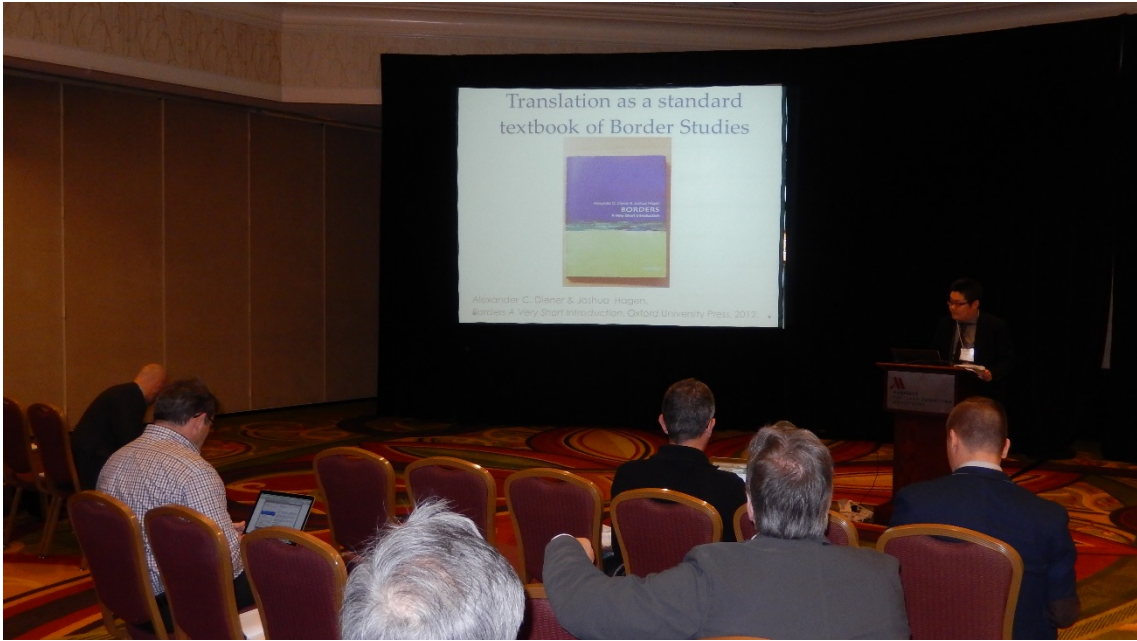
今回の学会では、筆頭著者のアレクサンダー・C・ディーナー准教授（カンザス大学）と共同パネルを組むことができた。お昼の時間のブラウンバグ・セッションであったが日本チームからも含めて多くの参加者を得ることができた。最初に、ディーナー氏から「境界、主権、領域」というテーマで、この教科書を執筆した経緯を話された後に、ご自身の研究領域である政治地理学の見地からボーダースタディーズへの学際的アプローチについて述べられた。その後、彼の二冊目の編著である“Borderlines and Borderlands”にもとづいて、地域研究の観点からロシアの飛び地であるカリーニングラードなどの歴史的特殊性について述べられた。私は討論者的な立場から、今回の翻訳の意義と目的について、日本を取り巻く東アジアの地域情勢に立脚しながら、今後どのようにボーダースタディーズを日本で紹介・導入していくのかという重要性について論じた。さらに、私が今回翻訳をして痛感したボーダースタディーズにおけるターミノロジーの重要性と、ボーダースタディーズが単なる地域研究における事例の集積ではなく、方法論的なアプローチをどのように深化させていけばよいのかについて、司会を務めてくれたABSの重鎮であるエマニュエル・ブルネイ・ジェリー教授の代表的論文である“Toward a model of Border Studies”のなかで提示されている議論に依拠しながら質問した。討論全体を通じて、ボーダースタディーズの学問的性質に内

在する構造的・方法論的問題を乗り越えていくための理論的枠組み（タイポロジーの開発）と比較・相関がボーダースタディーズにさらに備わっていけば、ディシプリンとしての有用性（レリバンス）がさらに高まるであろうし、日本の大学における教育・研究科目としての位置づけも現実味を帯びていくだろうと感じた次第である。

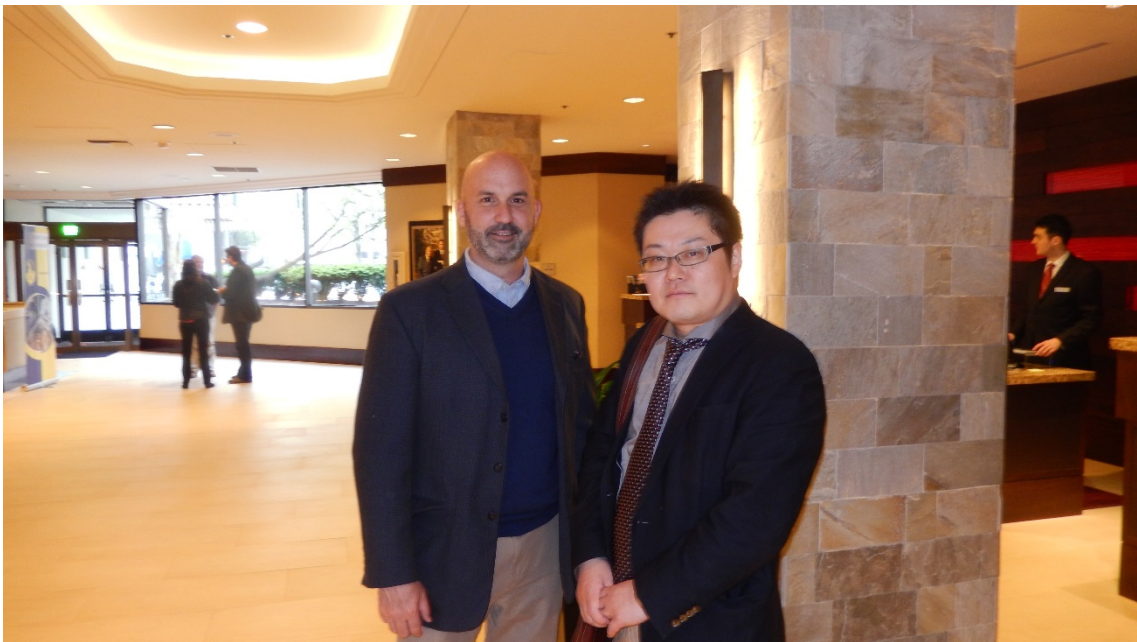
報告終了後、ウィラメット川を臨む地元でも有名なレストランに場所を移し、ディーナー氏と食事をともにした。オックスフォード出版会からすでに改訂第 2 版を出さないかという打診がきているようで、どのようなトピックを付け加えるべきかなどについてもざっくりばらんに話しをすることができた。翻訳をする過程で何回かメールでやり取りしているが、毎回丁寧に回答してくださることから、人物的に好印象をもっていたが、実際に会ってみてさらにそれが深まった。ディーナー氏は現在、ワシントン D.C.で国内研究をされており、今夏からはハーバードのユーラシア研究所での研究活動を開始されることに喜んでおられた。これを契機として今後も連絡を取り合い、さらなる研究交流を続けることができればと思っている。



【会場となったマリOTT・ウォーターフロント】



【筆者の報告風景】



【ディーナー氏と筆者】